

って見事なんでしょうね。それというのはね、秋から冬にかけて、このあたりは西風が吹くんです。そうすると、霞ヶ浦は西から東へ長いでしょう。だから西風が吹くと土浦から田伏、沖宿にかけて操業するんです。そして風に送られて、ずっとこちらまで流れてくる。だから南風が吹いている時は、手漕ぎで沖に出た距離しか操業出来なかったのが、西風が吹くと、霞ヶ浦を縦断する形になるんです。だからこれは壮観ですよ。各部落の船隊が入り乱れて、点々と浮んでね。表にきれいなものでした。

佐賀(善) それに、帆は真白いんじゃないんだよな。帆の帆は高さが二丈六尺。巾は一枚三尺の帆を三十五枚糸で編んで縫ぎ合わせてあってな。そして真中の部分から次々に新しい帆に替えていくんだよ。だから一つの船の帆でも、真中の五枚が新しいものもあれば二、三枚が新しく、あとは昨年、一昨年の古い汚れた帆の船もある。だから遠くから見ても、あれはうちのとおうちんの船だ。あれは隣の誰々の船だという具合に、岸から眺めていても判ったんだ。ああうちの息子は今あそこを走っている。うちのとうちゃんはあるだ、というのを、おかみさんはちゃんと判ったんだ。

折本 そうです。「何反白」(なんだんじろ)といつてね。一流(ひとながれ)を一反といつたんです。

佐賀(善) 三十五反の帆を巻き上げて、といったように三十五列になっていたんだよな。

折本 そうだね。最も腕のいい人は三十五列の帆を上げられたけれども、腕の悪い人は三十列とか二十八列とか、数が少なくなっていたんです。つまり昔は全て人力だから、体力もある腕も技術もある人は大きい帆を張れたけれども、腕のない人はやりたくても危く出て来なかったんですね。

帆は一回新調すると三年位いしかもたないで、あとは破れてしまうんです。だから毎年少しずつ新調するんですが、経済力のある人は、一年に五反も六反も新しくできるけれども、力のない人は一本も新調できなくて、まるきり真黒な帆を上げるといふことになる。

佐賀(善) だから、新らしくて、白くて、大きい帆を持っていてる者が、漁師としては立派だと言えたんだな。

折本 新調した帆は、帆柱に近い中央へ入れるんです。

だから真中が二反新調していれば二反白というし、五反新調すれば、五反白というわけです。だから遠くから見ても、あの五反白の船は、うちのとうちゃんだというところがわかるわけです。